

中学校学級集団の集団効力感育成に関する実践研究

－修学旅行における自治的な話し合い“夕礼”を通して－

いまざわ こうた いたう ひろき しのはら たかお
今澤 宏太・伊藤 博紀・篠原 孝雄*

抄録：本研究は、修学旅行における自治的な話し合いである夕礼（せきれい）が集団効力感に及ぼす効果について調査することを目的とする実践研究である。本校修学旅行に参加した3年生36名（男子18名、女子18名）を対象に、集団効力感に関する質問紙調査を行った。分析の結果、集団効力感の変容は見られなかったものの、よりよい学級集団を構築するために必用な信頼という集団効力感の基盤となる概念を体験的に内在化したことが示唆された。

キーワード：集団効力感、学級集団、修学旅行、夕礼

I. はじめに

青年期は心理的に親から独立し、自己の形成や自律を図る時期である。青年期に属する中学生にとって、同世代の集合体である学級集団が人格形成に及ぼす影響は大きい。中学生は、学級集団での諸活動を通じて、級友たちと互いに協力をし、役割・責任を分担し、支えあいながら成長していく（鎌田・淵上、2008）¹。また、中学生は学級での諸活動とともに経験し、対人関係を深めることにより、学級集団としての仲間意識や帰属意識をもつようになる（樽木、2005）²。

しかし、一見すると強い仲間意識・帰属意識を表す学級集団であっても、強い配慮や遠慮のもとに、自分の意見・意思を抑制していることが予想され（野里・横山、2014）³、外から見える友人関係とその背後にある友人に対して抱いている感情は、実際のところ同等のものではないと考えられる（榎本、1999）⁴。

中学生のおかれているこうした現状から、青年期における人格形成への影響を考えると、自分の意見・意思を率直に表明し、よりよい学級集団を構築

していく指導が学校現場に求められている。

よりよい学級集団を構築するために、集団宿泊体験が果たす役割は大きい。それは、日頃の生活指導・生徒指導が目指す社会性の育成や適切な人間関係の構築方法の習得を一遍に行える良い機会であると考えられるからである（文部科学省、2000）⁵。体験活動については、戦後の学習指導要領の改定の度に、その重要性が唱えられ、充実・拡大されてきた（文部科学省、2000）⁶。平成29年度告示学習指導要領においても、学校行事を中心に自然体験やボランティア活動などの社会体験の充実が求められており、教育課程上の配慮事項となっている。集団宿泊体験が児童に与える教育効果を調査・分析した「農山漁村での宿泊体験による教育効果の評価結果について」（文部科学省、2009）⁷によると、集団宿泊学習において、特に児童生徒の自治的な話し合いの時間を十分に確保することにより、仲間意識の向上が図れることが示唆されている。

そこで、本研究では、本校の修学旅行における自治的な話し合いである夕礼（せきれい）の実践を通して、中学生の学級における仲間意識・帰属意識の



図1 夕礼の様子

一つである集団効力感に着目し、その変容を考察する。なお、集団効力感（collective efficiency）とは、カナダ人心理学者であるA. Banduraが提唱した概念であり、内田（2011）⁸は『我々は集団として、課題に取り組むことができる』と成員間で共有される集合的な有能感」と解釈している。本研究においても、この解釈に立脚し、仲間意識・帰属意識の一つとして集団効力感に着目している。集団効力感に関する研究は、まだ萌芽といえる段階である。近年は、社会心理学において注目されつつあるが、今後は学校教育、とりわけ学級集団に関して解明されていくことが重要な課題であるといわれている（淵上ら、2006）⁹。

II. 方法

1. 調査の対象

本校74期生第3学年の1学級36名（男子18名・女子18名）

本研究では、令和4年5月に長野県松本市安曇・乗鞍高原にて行われた本校修学旅行における生徒の自治的な話し合いの場である夕礼の実践に注目する。夕礼は修学旅行の期間中、毎晩午後9時から午後10時までの1時間設定されており、学級委員がコーディネーターとして、自ら学級の現状を踏まえて議題を提案し、話し合いを進めていくものである。本校では、約半世紀にわたって、当地における修学旅行を実施しており、夕礼の実践について、豊富な経験と蓄積がある。

2. 質問紙調査

集団効力感の測定には、「中学校における学級集団効力感についての尺度」（淵上ら、2006）⁹を使用する。なお、本尺度の測定項目中には、「体育祭や文化祭」といった学校行事に関する表記があるが、本校の実情に合わせて、項目の表現について変更している。この尺度は、「I. 学級活動全般に関わる学級集団効力感（項目1から10までの10項目）」「II. 学校行事に関わる学級集団効力感（項目11から13までの4項目）」の2つの下位尺度、合計14項目によって構成されている。

質問紙調査は、調査対象者（N=36）に対し、事前（修学旅行の1週間前）と事後（修学旅行の2週間後）の合計2回行った。

調査対象者には「そうである（5）」から「そうでない（1）」までの5件法にて回答を求めた。さらに自由記述欄を設け、事前調査では「修学旅行に向けて抱いている期待や不安」、事後調査では「修学旅行を通して学んだことや今後の目標」について

生徒に自由に記述させた。

III. 実践の実際

夕礼は、修学旅行期間中午後9時から午後10時までの毎晩1時間行われた。なお、議論の状況によっては、予定時間を超過して話をつづけることもあった。

学級委員2名（男女1名ずつ）が司会・進行を務め、担任は基本的に口を挟まないこととした。しかし、議論の流れによっては、理由や根拠に迫るための「なぜか、どうしてか」や、視点の取得・立場の交換を促すための「～の立場から見るとどうか」、批判・価値の視点を与えるための「本当にそれでいいのか」といった声掛けを行ったり、学級に対する思いに関する説話をしたりするなど、学級委員が中心となって進めていく議論に広がりや深まりが生まれるよう働きかけを行った。また、夕礼後には、担任と学級委員とでその日の議論のふりかえりを行うとともに、翌日の議題や進め方について打ち合わせを行った。

36名の中には、1・2年次に構築できた人間関係も存在するが、修学旅行の実施時期は、新年度が始まって1ヶ月半ほどしか経過しておらず、人となりが分からないクラスメイトも一定数存在する。そのため、夕礼初日はアイスブレイキングのための時間として、自己紹介や学級委員があらかじめ準備してきたテーマについて小グループに分かれて話し合いを行った。その後、車座になり、学級の課題について話し合われた。「男女間に壁があること」、「学級の雰囲気が暗いこと」、「消極的なこと」の3つの課題点が挙げられた。

2日目では、1日目に挙げた3つの課題について、学級担任より「なぜこのような課題が生じるのだろうか」と発話をし、これら3つの課題について共通する根源について話し合われた。共通する根源については議論が収束しなかったが、「本音で話し合う」という手続き的な内容について課題意識が共通して醸成された。夕礼後の総括では、学級委員が「クラスメイトが本音で語り合うためには、まずは自分たちから本音を出し、本気さを伝える必要があること」を一部の生徒に対して呼びかけた。また、「人前で話すことの恥ずかしさを払拭することの難しさ」、「性格や個性のわからないクラスメイトを傷つけてしまわないように発言することの難しさ」についても話し合われた。

3日目は、疲れが出始め、少し重くなった雰囲気を解すためにアイスブレイキングから始まった。その後、2日目の共通意識である「本音で話し合う」

ことを意識し、生徒にとって話しやすい話題である「目指すべき学級像」や「どんな人になりたいか」について全員発言を行った。また、「目指すべき学級にするために学級で何をしたいか」について意見交換が行われた。これについては、方法論が飛び交い末梢的な議論に終始した。

4日目は、前日同様に「目指すべき学級にするために学級で何をしたいか」について議論がなされていたが、その中でスローガンの「違いを認め合おう」や「自分らしさを表現しよう」といった相互理解に関するキーワードが多く挙がり、収束しようとしていた。ここで、担任より表層的な議論に対する批判・価値の視点を与える発言があった。これを踏まえて、学級委員を含め、数名の有志によって議論のあり方について話し合いが続けられた。

最終日5日目、担任が冒頭に「信頼できる友だちがほしかった」という中学生時代の自身のエピソードを紹介し、生徒に「議論を通じて信頼できる友だちをつくってほしい」という願いを語った。担任の思いを受けて、学級委員より「本音を話すこと」を本日の夕礼の課題にしたいという提案がなされた。同調する声も上がったが、どちらかというと「本音を話すことが信頼できる関係を築くことに繋がるかは疑問である」や「信頼関係が築けていないのに本音を話せない」など否定的な声があった。それでも学級委員は、全員が全員信頼できる人ではないかもしれないが、信頼できる人がいるのなら勇気を出して本音を語ってほしいと粘り強く訴え続けた。そんな中、一人の生徒から突発的に現在の学級の雰囲気について、自身の過去に触れながら具体的な内容

について指摘する声があがった。その発言に触発され、次々と自分の過去・現在について赤裸々に語り始める生徒が現れた。多くの生徒が涙を流しながら吐露していた。ここに来て、夕礼のあり方が共通解や納得解を導き出すための議論から、テーマを踏まえて、自身の過去を含めたさまざまな角度から考える拡散型の議論に質的に変化していった。それらを通してクラスメイトの多様な考えや個性を知ることができ、修学旅行前に比べて信頼も深まったという見解を述べる生徒も現れた。

IV. 分析の結果と考察

1. 集団効力感の変容

質問紙調査によって得られた各下位尺度得点について、表1のとおり平均値と標準偏差を求めた（ $N = 36$ ）。その上で、事前・事後の変化について検討するために、Wilcoxonの符号付き順位和検定を行い、その結果は、 p 値として記した（表1）。なお、ここでノンパラメトリック検定を採用したのは、回答の分布として正規分布を仮定することができないことに依る。その結果、事前・事後において学級集団効力感の量的な変化は確認されなかった（ $p > 0.01$ ）。各質問項目の記述統計量・検定量は表2の通りである。

また、質的な変化を調査するべく質問紙調査における自由記述欄の内容について、KH Coderを用いて頻出語を抽出し、頻出した語句が用いられている感想を中心により詳細に変化の実態を明らかにした（図2・図3・表3）。

表1 各下位尺度の記述統計量・検定量（ $N = 36$ ）

下位尺度（尺度合計得点）	Pre		Post		p値
	M	SD	M	SD	
I 学級活動全般に関わる学級集団効力感	39.944	8.124	40.222	9.761	0.673
II 学校行事に関わる学級集団効力感	12.194	3.081	12.583	3.311	0.405

表2 各項目の記述統計量・検定量（N = 36）

測定項目		Pre		Post		p値	
		M	SD	M	SD		
I 学級活動全般に関わる学級集団効力感	1	私達のクラスは、授業をまじめに受け、つまずいた人やわからない人がいたら、みんなで教えあって勉強できる。	4.25	0.977	4.111	1.060	0.456
	2	私達のクラスは、クラスで問題が起こった時、自分達で話し合って解決策を見つけ、解決することができる。	4.139	0.945	4.222	1.166	0.490
	3	私達のクラスは、話し合い活動では、自分達で進んで意見を発表し合い、活発な意見交換ができる。	3.778	0.896	3.972	0.997	0.442
	4	私達のクラスは、自分たちの使った教室をきれいにしようと、みんなまじめにそうじに取り組むことができる。	3.972	0.870	3.972	1.013	0.900
	5	私達のクラスは、ボランティア活動などの体験活動に積極的に取り組むことができる。	3.778	0.833	3.778	0.962	0.872
	6	私達のクラスは、委員会活動や係活動を、公平にかつみんなで協力しながらやることができる。	4.194	0.962	4.083	1.100	0.735
	7	私達のクラスは、みんなで決めた学級の目標を守り、その目標に向かって努力することができる。	4.111	1.044	4.194	1.069	0.554
	8	私達のクラスのみんなは、クラス全体のことを考えて、一人一人が責任を持って行動することができる。	4.083	1.008	4.056	1.138	0.958
	9	私達のクラスのみんなは、お互いのことを信頼し、かくし事をせずに何でも話し合うことができる。	3.556	1.126	3.722	1.140	0.440
	10	私達のクラスは、みんな仲がよく、おたがいのよさを認め合い、助け合いながら学校生活を送ることができる。	4.083	1.034	4.111	1.157	0.803
II 学校行事に関わる学級集団効力感	11	私達のクラスは、体育祭やクラス対抗球技大会がある前には、他のクラスに負けないように、みんなでやる気を出し、協力し合って一生けんめい取り組むことができる。	4.028	1.114	4.194	1.069	0.354
	12	私達のクラスは、学芸会や音楽会など、クラスで発表をする時、「みんなで協力して成功させよう」という共通の目標を持ち、一人一人ががんばることができる。	3.889	1.075	4.194	1.069	0.131
	13	私達のクラスは、修学旅行や遠足では、みんなで楽しく過ごすことができる。	4.278	1.010	4.194	1.249	0.774

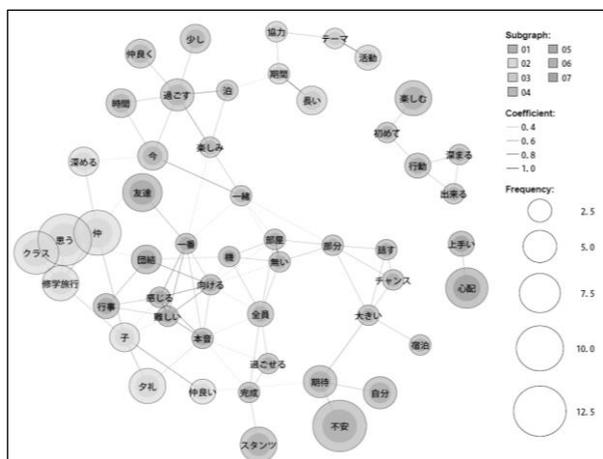


図2 共起ネットワーク（事前）

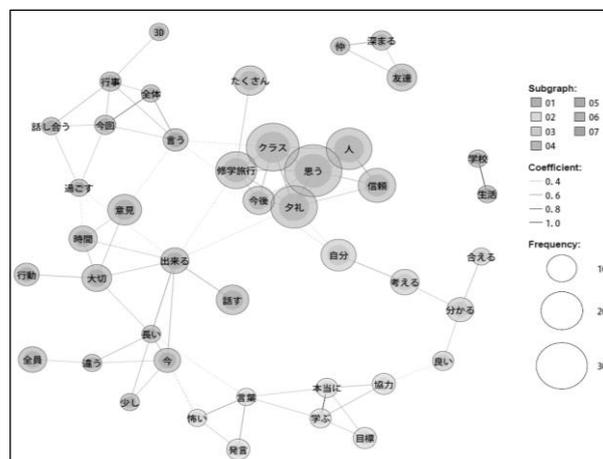


図3 共起ネットワーク（事後）

表3 自由記述欄での頻出語

	Pre	回数	Post	回数
1	思う	13	する	47
2	不安	13	思う	38
3	する	11	クラス	32
4	なる	10	夕礼	25
5	仲	10	できる	24
6	クラス	9	人	24
7	ない	8	修学旅行	19
8	心配	8	いう	16
9	できる	7	信頼	16
10	友達	7	ある	15

注：網掛けした箇所は事前・事後調査に共通して用いられている語を表している。

事前と事後で共通する語句を除外すれば、事前調査では「不安」や「心配」、「仲」などの語句が頻出しており、それらの語句は以下のような文脈で使用されていた。下線部は、筆者に依る。

- ・ 多くの野外体験活動や宿泊を通じて、これまでより自分と周りの人間関係を深められるのではないかと期待と、逆にそれがうまくいかないのではないかと不安が大きい。また、互いのことを分かり合え、みんなで個性を伸ばし、補い合えるようになるのではとも思うが、そこに自分がうまく入っていけるか不安でもある。
- ・ 3年生になってから、あまり話した事がない友達とも、仲良くなれるチャンスだと思っています。その一方で1週間も家を離れて友達と過ごした経験ないので少しか不安な部分もあります。でも期待の方が大きいです。

これらの回答から、主に長期間にわたる学級での集団生活への不安を感じる一方で、学級の友人と仲を深めることに期待する生徒の姿が見て取れる。一方で、事後調査では「夕礼」や「人」、「修学旅行」、「信頼」などの語句が頻出しており、それらの語句は以下のような文脈で使用されていた。下線部は、筆者に依る。

- ・ 夕礼を通してまだまだ信頼し合えず、活発な議論を行っていくことが難しいと思った。信頼し

合えるクラスをつくっていくことが今後の課題だと思った。

- ・ 結局、本当に心から信頼している人でなければ本音や心の声を伝えることはできないことを学びました。これから、〇組が行事で団結することを目標にしたいと思います。
- ・ 私は、修学旅行を通して学んだことはここに書ききれないほどとても沢山あります。まずは人を信頼するという事です。これは今までたくさん耳にした単語だと思うけれど、この言葉の大切さ、重要さ、そしてどれだけこの言葉に助けられたか、それを再確認することが出来ました。夕礼は本当にたくさんの学びがありました。〇組はとても楽しく、最高のクラスだと思っていただけ、人によっては楽しくない、面白くないと思っている人がいることが本当に怖くて、それなのに私達を信頼して本音を語ってくれる人がいたりして、それもまた怖くて本当にこれもまた言葉では表せないような深みがありました。その中でも私は、やはり怖くて発言をすることがあまり出来なくて、みんなよりも発言する数がとても少なかったです。それが1番の心残りというか、後悔というか、私がかたがた発言していれば、学んだ事も違ったかもしれないし、もっと話し合いが変わっていたかもしれないと思うも悔しくてしょうがないです。

事後調査において、事前調査では用いられなかった「信頼」の語句の用いられ方に着目すると、現状では学級全員が信頼し合うことは難しいと考える生徒の姿が伺える。出発前には学級の友達と仲を深めたいと考えていた生徒が、修学旅行を経て全員を信頼することは難しいと考えるようになったことは本実践が生徒に与えた大きな影響の一つである。

しかしこの変容は、修学旅行を終えて学級集団の関係性が著しく悪化したということではない。事後調査の記述では、現時点での学級の課題を捉えながらも、今後の学校生活の中で互いを信頼できることが目標に挙げられている。このことは、事前の段階で漠然と仲を深めると掲げていた目標に対して生徒の解像度が高まったことの現れだろう。言い換えれば、生徒の当初の目標であった集団や他者との仲を深めることはどういうことなのかを生徒自身が再考させられている。夕礼の時間を中心に、集団や他者に対して自分の本音を率直に表明するためには信頼が必要不可欠であることを実感したのである。同時に、集団や他者と信頼し合うことの困難さを感じながらも今後の学校生活の中でよりよい集団を形成していくことを目標に掲げるようになっていく。

つまり、夕礼という自治的な話し合いの時間を5泊6日の長期間に渡り継続的に実施したことで、学級の仲を深めること、すなわち、よりよい学級集団を構築するために必要な信頼という集団効力感の基盤となる概念を生徒が体験的に内在化したことが示唆される。

V. 成果と今後の課題

本研究では、修学旅行における自治的な話し合いである夕礼が集団効力感に及ぼす効果について調査を行った。質問紙調査によって得られた各下位尺度得点について、ノンパラメトリック検定を用いて分析を行った結果、事前・事後において学級集団効力感の量的な変化は確認されなかった。

一方で、事前・事後の自由記述欄で頻出した語句が用いられている感想を中心に抽出したところ、事後の感想に、「夕礼」や「信頼」という言葉が多く出現していることや、その言葉が用いられた感想を読み解くことで、生徒たちが夕礼を通して、集団効力感の素地となる「本音で語ること」や「信頼すること」が集団生活において必要不可欠と認識したことが示唆された。

しかし、本音を語ることはいかなる学級集団においてもハードルが高い活動であり、抵抗感を持つ生徒は一定数いるため、課題設定の工夫が今後の課題である。

注

* 堺市教育委員会事務局（元 附属天王寺中学校）

引用・参考文献

- [1] 鎌田 雅史・淵上 克義「児童の学級集団効力感認知に関する研究」、日本教育心理学会総会発表論文集（50）、2008、p. 566
- [2] 樽木 靖夫「中学生の仲間どうしのつき合い方を援助する学校行事の活用」、教育心理学年報（44）、2005、pp. 156-165
- [3] 野里 有希・横山 剛「中学生の仲間集団の特徴と拒否不安及び自己表明との関連」、文教大学人間学部研究紀要（15）、2014、pp. 259-271
- [4] 榎本 淳子「青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達の变化」、教育心理学研究（47）、1999、pp. 180-190
- [5] 文部科学省「体験活動事例集－体験のススメ－」、2000、
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/04121502/055.htm (2022. 04. 01 確認)

- [6] 文部科学省「農山漁村での宿泊体験による教育効果の評価結果について」、2009、
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/nousan/_icsFiles/afieldafie/2010/10/18/1297595_2.pdf (2022. 04. 01 確認)
- [7] 文部科学省「中学校学習指導要領（平成29年告示）」、2017、
https://www.mext.go.jp/content/1413522_002.pdf (2022. 04. 01 確認)
- [8] 内田 遼介・土屋 裕睦・菅生 貴之「スポーツ集団を対象とした集合的効力感
- [9] 淵上 克義・今井 奈緒・西山 久子・鎌田 雅史「集団効力感に関する理論的・実証的研究」、岡山大学教育学部研究集録（131）、2006、pp. 141-153

A Practical Study on The Development of Collective Efficacy in Junior High School Classroom Groups

— Through Autonomous Discussions in School Trip “Sekirei” —

IMAZAWA Kota ・ ITO Hiroki ・ SHINOHARA Takao

Abstract: This is a practical study aimed at investigating the effect of “Sekirei”, an autonomous discussion during a school excursion, on collective efficacy. A questionnaire survey on collective efficacy was conducted on 36 third-year students (18 boys and 18 girls) who participated in the school excursion. The results of the analysis suggested that although no change in collective efficacy was observed, the students experienced and internalized the concept of trust, which is necessary to build a better class group, and which is the foundation of collective efficacy.

Key Words: Collective Efficiency, Class Group, School Trip, Sekirei